すべての子どもの笑顔のために社会教育が持つべき視点

子どもの日常への眼差しを　～子どもからのメッセージを受けとめるために～

日常的に子どもへの眼差しを向けることにより、すべての子どもからのメッセージを受けとめられる地域社会でなければいけない。すべての子どもの笑顔のために必要なことは、すべての子どもが「見守られている」という実感を持つことであり、そのために、すべての大人が子どもの日常に眼差しを向けなくてはいけない。

大人が子どもに声をかけることができる関係性の中で、正しい子ども理解が広がり、子ども自身にも「人を思いやる気持ち」が育まれていく。子どもは大人や地域に向けて、何らかの形で思いを表現し、発信している。多様な世代がそうした思いを受けとめ、子どもに関われることが望まれる。

地域の中でつながりの実感を　～一人ひとりが子どもと関わり合うために～

教員が子どもにどう関わるか、子ども同士でどう関わるか、子どもがどのような教員や大人に出会うか、どのようなコミュニティで、どのような人間的なふれあいを経験したかが、子どもの精神的発達に大きな影響を与える。異世代の交流による広く緩やかなつながりを子どもたちが実感できる場所は、子どもたちにとっての居場所となる。

放課後子ども教室などで、日常的に子どもを見守っているボランティアやコーディネーターの役割を地域全体で理解し、学校教育とは異なる社会教育の視点で子どもを育てていかなければならない。一人ひとりが地域の一員として子どもに関わり、つながりを持つことにより、子どもは安心感を覚え、同時に地域の一員としての帰属意識を高めることができる。

子どもの基本的人権を守る　～要保護、要支援、啓発の観点から～

地域が、子育ての支援をするとともに、家庭での教育に立ち入ることも必要になってきている。子育て、子どものしつけは親だけの責任、親だけの権限で行うものという観念を脱することが大事である。子育てを人権の観点から捉え、「不適切な養育」について、関心を持ち、大人たちが学び合える地域力も同時に求められる。

そのために、保護者、学校、地域が連携しながら、教育と福祉・保健・医療等との連携も視野に入れた上で、子どもの自尊心を大切にし、要保護、要支援、啓発の観点から「不適切な養育」とは何かということについて、すべての大人が関心を持ち、考えることができる機会づくりが必要である。

社会教育委員会議から

ーすべての子どもの笑顔のために、地域の思いを実現するにはー

○学校・家庭・地域が相互に連携協力することにより地域全体の教育力の向上をねらいとした「地域共育コミュニティ」の形成に向けた取組を支援していく。そのため設立当初の趣旨を確認するとともに、新たな課題に対応しながら、今後の方向性を確認し合う機会を充実させるとともに、子どもたちがどのように変わったか、大人がどのように変わったか、地域社会がどのように変わったか、社会教育委員会議の中でも、振り返りながら議論することが必要である。

○地域の中で子どもについての課題を共有し、共に学び合える社会的つながりが求められる。地域のために、子どものために「何とかしたい」という思いを持った人はたくさんいる。そうした人たちをいかに地域の中で巻き込んでいくかが社会教育の課題である。そのためには、そうした思いや活動が認められ、正当に評価される地域社会が望まれる。

○生存、発達、保護、参加の観点から子どもの基本的人権を保障し、個々の子どもの特性を理解し伸ばしていくために、広く緩やかな多様性のあるつながりの中で自分の居場所を選択できるコミュニティの存在が大切である。そのためにも、すべての大人が子どもに関心を持ち、それぞれの子どもへの思いを重ね合わせ、つなぎ合わせていくことが大切である。

○地域の学びの拠点としての公民館の役割を再確認し、子どもや保護者、教員、地域住民等が主体的な学びを実現するため、社会教育関係職員の一層の資質向上に努めるべきである。

このリーフレットに関するお問い合わせ等は、下記までお願いいたします。

和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課

〒640-8585　和歌山市小松原通一丁目１番地

TEL　０７３－４４１－３７２２

「すべての子どもの笑顔のために、今、社会教育ができること」

近年、人々の生活環境の急激な変化や、地域における人と人とのつながりの希薄化により、子どもに関わる様々な問題が生じています。いじめや不登校、ひきこもり、児童虐待、生活習慣の乱れ、学力・体力の低下等、それらの問題の要因は複合的、重層的に絡み合っており、地域全体の課題として考えていかなくてはいけません。

今期の会議は、「すべての子どもの笑顔のために、今、社会教育ができること」をテーマに、学校・家庭・地域の連携、さらに、教育と福祉・保健・医療等との連携を視野に入れた上で、協議題に関連した事例紹介や社会教育の先進事例等を踏まえて議論を深めてきました。

社会教育委員会議として、すべての子どもの豊かな成長を支える社会教育活動の今後の方向性や方策等について協議した内容について、リーフレットにまとめました。

平成 26 年５月

和歌山県社会教育委員会議

【事例紹介①】

大阪人間科学大学　社会福祉学科　助教　金澤　ますみ氏
（平成 26 年４月より桃山学院大学社会学部准教授）

「子どもたちの姿とその背景について　―スクールソーシャルワークの観点から―」

SSW（スクールソーシャルワーカー）として、学校現場にかかわってきて見えてきたことがある。「子どもの貧困問題」である。それは、家庭の経済状況が、子どもの学校生活にも影響を与え、ひいては、子どもの成長・発達にも大きな影響を及ぼしている現実だ。ひとり親家庭、障害のある方、外国にルーツを持つ方等への支援制度の不足のため、社会的不利の重なる家庭で、保護者も子どもも苦悩を抱えている。子どもたちの問題は決して「心の問題」ではなく、社会環境のなかで起こっている「関係性の問題」として捉える必要がある。子どもを変えようとするのではなく、大人である私たちが関わりの方向を変えることが、子どもとつながる第一歩となる。

※　SSW とは、子どもを取り巻く環境に注目し、子どもの視点に立ち、社会福祉的な立場から、家庭訪問や教職員への助言をする専門職。

議論のポイント

住みやすいまちへ　～子どもたちからの発信～

子どもたちは、地域の一員として地域に貢献し、喜ばれ、「ありがとう」といってもらえるような体験をすることで自信を持ち、人生観、職業観を高め、住みやすいまちづくりへの関心を高めていく。子どもからの発信を大人が受けとめられる地域社会でなければいけない。

多様な世代の関わり合いを

異世代の人とどのようにしてコミュニケーションをとったらいいのかわからないという若者が多い。地域の中で、多様な世代による交わりがなかったことが要因として考えられる。まず大人が子どもに声をかける勇気を持ち、世代をこえて関わっていかなくてはいけない。

ぶつかり合うことが苦手な子どもたち

現代の子どもたちは、優しい集団にみえるが、実はぶつかり合うことを避けている。自己有用感、自尊感情を持つことができる経験に乏しく、自分に自信がないから自己防衛してしまう。子どもたちが、目標や将来の展望をきちんと持てるしかけづくりが必要である。

まずは、つながりやすいところから

学校と地域が連携していくのは容易ではない。地域には、居住地としての地域もあれば、職場としての地域、消費の場としての地域など、さまざまである。「個々の地域性を活かして、まずはつなげていけるところから」という発想で、学校・家庭・地域が連携していくべきである。

地域で心がけていくこと

子どもからのメッセージを受けとめられる関わり

【事例紹介②】

NPO 法人白浜レスキューネットワーク理事長　藤藪　庸一氏

「教育が人を大人にする」

自殺防止をめざし、「いのちの電話」での保護活動や共同生活をとおしての救済自立支援活動とともに、子どもの活動支援に携わってきた経験から、地域全体で子育てを支援していくことの意義を痛感している。福祉、教育に関する活動は、行政だけで取り組むものではなく、地域住民が関心を示さなければ意味がない。特に子育てに関しては、地域全体での支えが必要であり、子育ては教わり学ぶものである。人間が大人になり、大人が親になるまでに、いろいろなプロセスがある。その過程にはいろいろな支援が必要であり、地域の中で人と人との関わりの中で、世代間の好循環を作っていかなければいけない。

議論のポイント

奉仕の精神

「ほっとけやん」(注)、「何とかしなければ」という奉仕の精神は、幼少の頃に、温かいまなざしの中で育つことにより芽生える。望ましい世代循環をしていくためにも、奉仕の精神で活動されている方々を地域の中で結集し、地域全体で奉仕の精神を大事にし、大きく育てていかなくてはいけない。

地域のキーマンの存在

奉仕の精神を有した人々をつなぎ合わせることができるコーディネーターが重要である。地域のキーマンといえる人の周囲には、その思いと行動を支える人たちが必ずいる。そうした人たちに思いが受け継がれ、そこから新たなキーマンが生まれていく好循環を生み出していかなくてはいけない。

子育ては大変という共感と寄り添い

地域全体で子育てを支援しないと、子育てが難しくなってきている。子育ては、自然に身につけていくものではなく、学んでいくものである。現状は、核家族化が進み子育てに悩んでいる親が多い。子育てへの共感と寄り添いの気持ちを持って、地域全体で子どもを育てる支援が大事である。

多彩な出会い、学び合い

子どもたちにとって、どのような大人、どのような教師と出会い、関わっていくかが大事であるのと同時に、大人も多彩な出会い、学び合いにより成長していく。多様なコミュニティの中で、広く緩やかな人とのつながりをとおして、生きていけるようにしなければいけない。

（注）平成 24 年６月社会教育委員会議報告書　「『ほっとけやん』という思いが地域をつなぐ」

地域で心がけていくこと

すべての大人がすべての子どもに関心を持つ地域づくりを

【事例紹介③】

和歌山県立医科大学保健看護学部　教授　柳川　敏彦氏

「子ども虐待の理解と対応について」

日本は、外国と比べて、虐待の概念を狭く捉えている。子どもの虐待を目に見えて酷いものだけでとらえてはいけない。子どもの虐待とは不適切な養育を意味し、人権の観点から広く考えなくてはいけない。虐待が起こる原因として、親側の要因、子ども側の要因、家族の要因に加え、心理的社会的孤立要因が共通項として見受けられる。子育ては学んでいくものであり、子どもに対してどう向き合い、どういう声かけをしたらいいのか、どう親子の関係性を作るかを学んでほしい。要保護、要支援、啓発、この三重構造が虐待と向き合う取組モデルである。

議論のポイント

子どもの基本的人権の保障

生存、発達、保護、参加の観点で子どもの基本的人権を保障していかなくてはいけない。子どもの虐待に関しては、養育とは何かを幅広く捉え、不適切な養育が子どもへの虐待であることに気づき、人権を尊重する視点で、子どもに接していかなくてはいけない。

開かれた学校づくり

子どもの異変に最も気づきやすい機関は学校である。学校が中心になり、幅を持って事象を認知し、関係機関や地域の支援の力を結集していかなければいけない。また、学校が地域とつながり、連携が取れていてこそ、適切な対応が取れる。

子どもを見守るセンサー

子どもの人権、子どもとの関わり方をグローバルな観点から考えていくことが大切である。時代が変われば関わり方も変わるという中で、子どもについて「知る」、「学ぶ」、「学び合う」ことができる環境を構築し、子どもを見守るセンサーを常に磨いていかなければいけない。

気づきから思いへ、思いを行動へ

子どもの異変に気づき、「ほっとけやん」という思いを持っている人は地域には多い。そうした思いを行動にしていくには、勇気が必要である。思いを持った人たちが関わり合い、つながっていけるしかけづくりが求められている。

地域で心がけていくこと

アンテナを高く張り、気づきから行動へ